

3 村田町村田伝統的建造物群保存地区の特徴

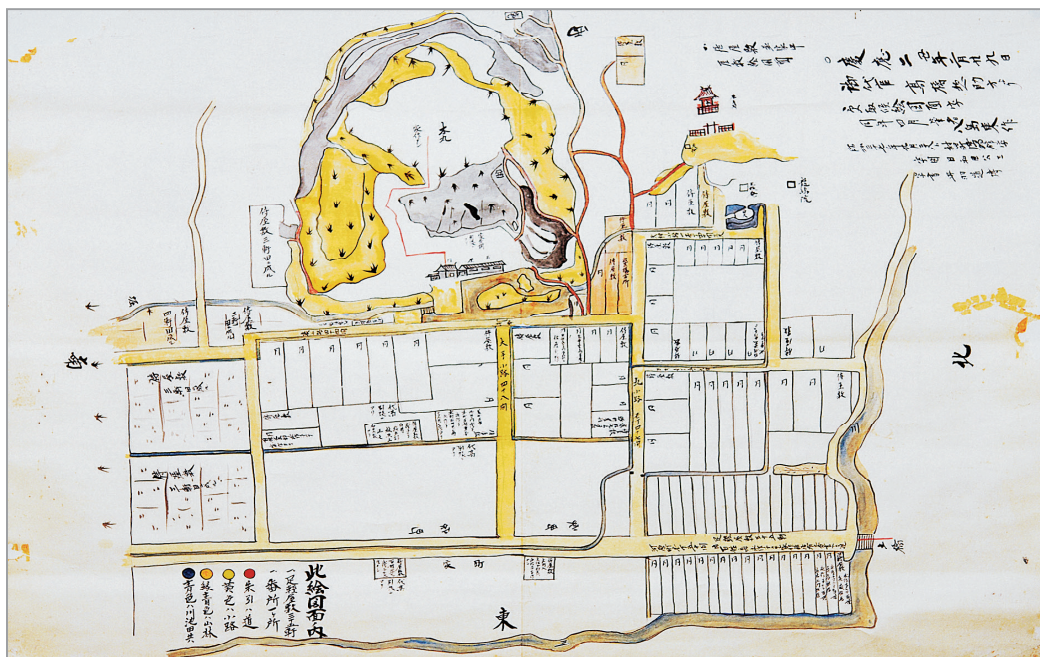
町の構成と町並み

最も古い村田の町の姿を示す史料は、慶応2年(1866)の状況が描かれているとされる『居屋敷並家中屋敷絵図面』(写)です。この絵図を見ると、村田館と川(現 荒川)の間に整然と街路が配置され、それに囲まれた街区の様子が解ります。街路は、村田館に東面して「表小路」、番所から東方向に「大手小路」、その北側に平行して「北小路」をそれぞれ配し、それらによって区画された宅地は「侍屋敷」です。さらに、その東側に道幅の広い街路(旧街道)が南北に通っており、その両側には、北から「足軽屋敷」「町家」と記された街区となります。また、街路の中央や脇に配置された水路の様子も窺えます。

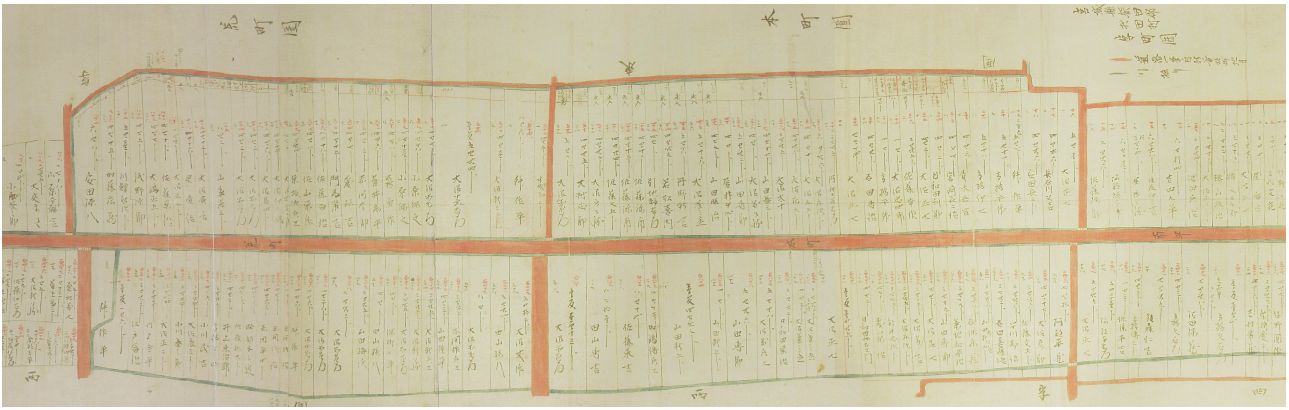
このような町の骨格が形成され始めた時期は不明ですが、前出の『柴田郡村田郷風土記御用書出』の記述などにより、江戸時代中頃には既に町の下地はあったものと推測されます。

明治時代の地籍図を見ると、前述の絵図に描かれている「町家」の街区、すなわち従来の商業地(荒町、本町、南町東側)に加え、侍屋敷であった区画(西側街区の一部、南町西側)、および足軽屋敷であった区画(河原町)へ商業地が拡張されていることが解ります。また、東側街区の背後の路と、その道へ「表小路」から鍵型に通り返る幅の狭い路が増設されています。大正期には、西側街区の背後に新たに路が敷かれました。旧街道の中央にあった水路は、明治の地籍図が描かれた時点では道の両脇に位置が変更されています。こうした町割の状況は、ほぼ現在に受け継がれています。保存地区は、この歴史的な商業地のうち、荒町と本町に当る範囲です。

保存地区内の主要な伝統的建造物は、江戸後期から昭和20年代までに建てられた商家建築です。中でも、ひととき存在感のある土蔵造の店は、耐火性能を備えると同時に富の象徴として、明治前期から大正期にかけて次々と建てられ、本町地区を中心に数多く残ります。戦後以降、改造や建て替えが行われたところも少なくありませんが、今なお多くの伝統的建造物が残された町並みは、近世から戦後にかけて商業地として繁栄した町の歴史を伝えています。



江戸末期の町の様子を描いたとされる絵図『居屋敷並家中屋敷絵図面』(写)



明治時代に描かれたとされる地籍図

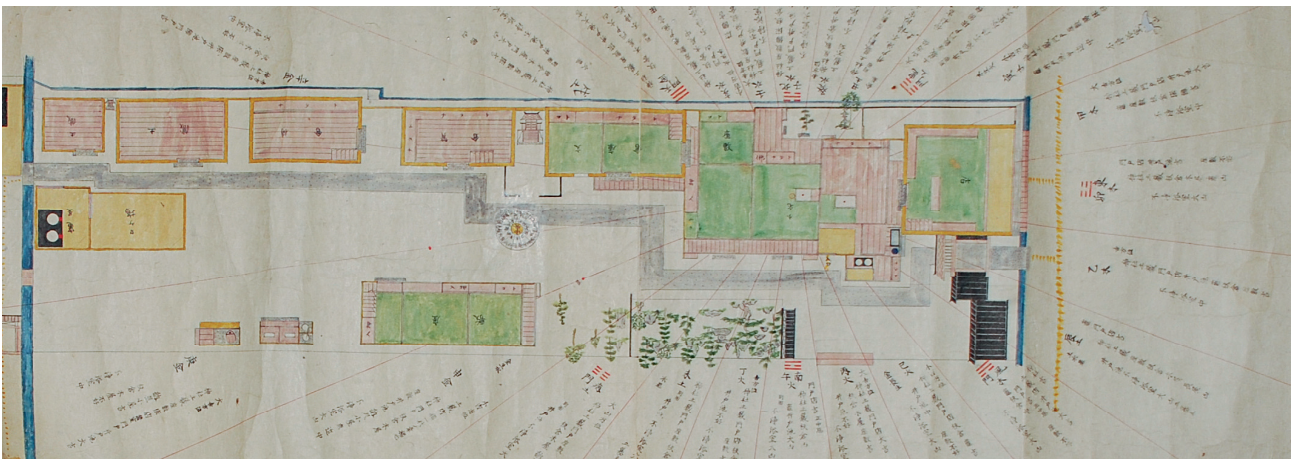
地割と建造物の配置

保存地区では、南北に通る旧街道(表通り)に対し、間口が狭く奥行が深い短冊型の敷地割が保たれています。間口は、3間(約5.5メートル)から4間(約7メートル)程度が多く、それを2つ合わせた6間(約11メートル)程度のものや、それ以上のものもあります。奥行は、表通りに対して西側の敷地では37間(約67メートル)程度、東側では47間(約85メートル)程度と長大であり、東側は西側よりやや深くなります。

主要な建築物は、店と主屋です。店は表通りに沿って建ち、主屋は店の背後に棟を違えて接続します。職専用の空間である店と、住専用の空間である主屋というように、用途ごとに建築物を明確に分離する商家の構成は独特なものです。これら建築物は敷地の北側に寄せられ、空いた南側に、表通りから敷地背後の路(裏通り)へと貫通する幅半間から1間程度の外通路を設けます。この通路によって、敷地内の通行とともに日照や通風が確保されます。外通路の入口には、店に寄り添うように表門を配し、敷地の間口が広い場合は、門の両脇に袖塀が付されます。裏通り側にも、同様に裏門や塀を設ける場合もあります。このような建造物の配置、そして、それらが成す店と表門・塀が建ち並ぶ景観は、保存地区の大きな特徴です。

その他、敷地内には複数の土蔵や各種付属屋が建ちます。土蔵は、主屋の奥から裏通りに向かって、敷地の北側に寄せて並ぶのが一般的ですが、間口が広い敷地では、表通りに沿って店の脇に配する場合もあります。また、釜屋や浴室等は、間口が広い敷地では外通路を挟んで主屋と向かい合せて建つ場合もありますが、それ以外の付属屋は敷地の奥に建てられます。

隣地との境界に塀等はあまり設けられず、各建築物の北側外壁面が隣地境界に沿って並びます。特に、敷地の北側が街路に接する場合は、外壁面が連続する情趣ある景観を呈します。一方、南側が街路に接する敷地では、街路沿いに土塀や板塀を回す場合もあります。



明治23(1890)年の家相図[大沼正七家]

建築物の伝統様式

店

店はタナと呼ばれ、その構造形式は、土蔵造、^{ぬりやづくり}塗屋造、真壁造の3種類に分けられます。

土蔵造の店(店蔵)は、外壁や屋根廻り等を厚い土で覆い防火性が考慮された構造です。屋根形式はほとんどが切妻造平入で、切妻造妻入の事例は1棟のみ存在します。いずれも二階建てで、表側には間口一杯に奥行き1間程度の下屋(本体から張り出し一階のみに差し掛けられる屋根)が付きます。屋根は、土と漆喰で軒廻りを覆う^{ぬりごめ}塗籠形式と、厚い土で覆った屋根の上に木造の小屋組みを設けて二重屋根とする置き屋根形式とに大別されます。屋根材は、現状ではいずれの場合も棧瓦葺きが多く見られますが、かつては^{こぼ}木羽(薄い木の板)葺き等も存在したようです。

外壁は白漆喰塗り仕上げとし、腰壁は一階・二階ともになまこ壁(外壁を保護するために、平瓦を張り継ぎ目に漆喰を半円形断面に盛った装飾的な壁)をあしらうものもあります。北側外壁は一般に下見板張り(長い板材を横に用いて互いに少し重なるように張ること)とします。

店蔵の一階は、下屋部分のみを土間とし、その他は畳敷き又は板張りの一室です。本体と下屋の境には、巨大な^{さしもの}差物(構造材を兼ねる長方形断面の^{かもい}鴨居)を渡し、その中央を太い柱が支えます。店の正面において目立つ部材である差物や柱には漆が塗られ、構造的な役割の他、富を誇示する要素にもなっていたようです。

一階は、明治期頃までは、表通りに向けて全面的に開口とし、日中は開放していました。夜間等は下屋境で上げ下げするしとみ戸(摺り揚げ戸)で戸締りしました。更に、火災に備え防火戸を備えていたと思われます。大正期以降は、しとみ戸に替わって、下屋の柱間に設置した板戸やガラス戸によって戸締りする様式が現れました。その場合、戸袋を設け防火用の鉄戸等を備えるものもありました。

二階は、床は板敷きで天井や造作を施さず、当初より物置等として使用されていたようです。通りに向けて鉄格子を取り付けた明かり取りの小窓を二か所設け、観音開きや片開きの土扉を備えます。窓上には掛け庇を付します。

店蔵の建築年代は、雛箱や棟札等によって判明する例は、ほとんどが明治期から大正期です。最も古い例は、雛箱の墨書より文政5年(1822)であることが知られます。

塗屋造の店は、間口2間半程度の小規模なものがほとんどです。切妻造妻入で、店蔵と同様に表側に下屋を付けます。外壁を土で覆いますが、土蔵造よりも壁厚は薄く多くは軒裏を塗り込めません。一階開口部は店蔵と同様ですが、二階は扉のない小窓を1か所穿つ簡素な造りとなります。



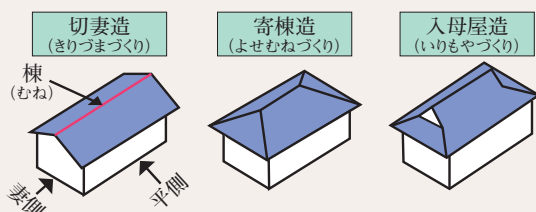
土蔵造の例



塗屋造の例

○用語の説明○

屋根の形



平入(ひらいり)・主な出入口が平側にあること。

妻入(つまいり)・主な出入口が妻側にあること。

大壁(おおかべ)・柱が仕上げ材で覆われた壁。土蔵造や塗屋造の壁がこれにあたる。

真壁(しんかべ)・仕上げを含めた壁厚が柱幅内に納まる壁。壁面に柱や梁などの構造部材が現れる。

真壁造の店は、現在、保存地区内にはほとんど残っていませんが、昭和初期頃の写真を見ると、いくつも軒を連ねていたことが窺えます。間口2間半程度の規模で、切妻造妻入および寄棟造妻入が見られます。下屋の建具は板戸やガラス戸で、二階の開口部は、幅1間から半間程度の窓を中央に設けます。

塗屋造、真壁造のいずれも、現状の屋根は棧瓦葺や鉄板葺ですが、古写真を見ると、当初は木羽葺や杉皮葺、そして石置屋根が多かったようです。



真壁造の例

主屋

主屋は、店の背後に屋根の向きを直行方向にして配置します。店蔵の場合は、店と主屋は1間程度の間隔を空けて切妻屋根を架けて双方の行き来の利便を図り、床と開口部を設けて一室として使用する場合があります。主屋の屋根形式は、切妻造、寄棟造、入母屋造が見られます。元来は平屋ですが、明治中後期以降は二階建ても出現します。構造は真壁造で、現状の屋根は棧瓦葺や鉄板葺ですが、古写真では木羽葺等も見られます。

一般的な一階の間取りは、3、4室が串刺し状に並び、店側より台所、茶の間、座敷と奥に行くほど部屋の格式が上がります。一方、明治前期以前の間取りは、奥を台所とする逆配列であった事例も知られます。二階建ての場合は、一般に炉のある茶の間上部は吹き抜けとなり、印象的な空間が形成されます。外通路に面する部分の柱間は掃き出し窓で、非常に開放的です。建具は、広縁がない場合は障子戸又はガラス戸として外側に雨戸を設置し、広縁がある場合はガラス戸と雨戸を設置します。建物内部へは外通路に面した勝手口や掃き出し窓から出入りします。大正期以降になると、茶の間の前に玄関を構えるものも出現します。



平屋の例



二階建ての例

北側の外壁は、上部を漆喰塗または荒壁とし下部を下見板張りとしします。主屋の建築年代は、店蔵同様、明治期以降のものが多く、その構造上、店と主屋が同時期の建築ではない場合があります。

土蔵

土蔵は、主屋に近接して座敷が設けられる内蔵、味噌蔵や文庫蔵等といった収納蔵、酒蔵や醸造蔵といった製造蔵など、種類や規模は多様です。多くは切妻造平入で、敷地の奥行方向に棟を平行して建ちます。屋根はほとんどが置き屋根形式の棧瓦葺きです。外壁は漆喰塗り仕上げとし、なまこ壁や下見板張りの腰壁を設けます。道路や隣地に沿う外壁は、全面的に下見板張りとする場合があります。大正期以降はモルタル塗り仕上げも見られるようになります。出入口の上部には出の深い庇を差し掛けます。



その他

その他の付属屋は、釜屋や便所、浴室、離れ等、多種多様です。いずれも真壁造で勾配屋根を設けます。

工作物・庭など

門・塀

多くの場合、敷地の間口にかかわらず通りと外通路の境に門を設けます。表門は、軒の出が深い大きな屋根を冠する大型の門と、簡素な造りの小型の門に分けられます。

大型の門は、棟門と腕木門を合わせたような構造で、大きな屋根を載せるための工夫がなされています。柱間には、両開き戸や片開きの大戸が取り付けます。腕木等に施された繰形や彫刻、家紋の浮彫や透かし模様が施された欄間に、各家の個性が表れます。また、門の両脇に付される土塀や板塀の意匠も、家ごとに工夫を凝らします。

一方、小型の門は、柱間が1間未満の腕木門で、間口が3間半以下の小規模な敷地に設けられます。軒の浅い屋根は勾配が緩く、現状は鉄板葺ですが当初は板葺や杉皮葺等であったと推測されます。柱間には、引き違い戸か片開きの大戸が取り付けます。また裏通り側に表門と同様の形をした裏門を設ける家もあります。

江戸後期の家相図には門が描かれており、少なくともこの頃には門構えの商家が出現していたようです。しかし、このような豪華な門が建ち並ぶようになったのは、商家が本格的な門を構えることが可能となった明治以降のこととされます。



大型の門



大型の門

小型の門と石畳

石畳・屋敷神など

門の足元には石畳を敷き詰め、更に、門から連続する外通路も同様に石畳です。これらの石材は、近年まで地元で採掘されていた村田石が使用されています。なお、村田石は建築物の礎石などに幅広く使用されています。

家内安全や商売繁盛を祈る屋敷神は、多くの家で祀られています。これらは家ごとに大きさや意匠が異なり、技巧を凝らした立派な造りの社も少なくありません。

また、町並み唯一である酒造商家の庵看板は、唐破風屋根を冠し精巧な彫刻が施された印象的な存在です。



石畳と庭



屋敷神

庵看板

環境物件

庭は、主屋と外通路を挟んで向き合う位置や主屋の裏側に設けられます。中には、植木や池、石灯籠、庭石等を配した見事な庭園もあります。門や塀越しに垣間見ることができる庭は、町並みに彩りを添える重要な景観要素となっています。